



Data

監督・脚本: トム・エドモンズ
出演: トム・ウィルキンソン / アナ
イリン・バーナード / フレイ
ア・メイヴァー / マリオン・
ベイリー / クリストファ
ー・エクルストン / ゲシン・
アンソニー / マーシャ・ウォ
レン / ナイジェル・リンゼイ
/ ヴェリポール・トビッチ

■ショートコメント■

◆チラシによれば本作のストーリーは次のとおりだ。

青年ウィリアムは、小説家を目指すも全く芽が出ず、人生に絶望し7回も自殺を試みたがいずれも失敗する。一方、長年殺し屋としてキャリアを積んできたレスリーは、英国暗殺者組合の毎月の暗殺件数のノルマを達成できず引退に追い込まれていた。ある日この二人は出会い、「死にたい小説家」ウィリアムは、「クビ寸前の殺し屋」レスリーに一週間以内に暗殺してもらおう契約を結ぶ。これにて一件落着!と思いきや、ウィリアムの前にキュートな彼女が現れ…「契約破棄」から始まるワケあり二人の“人生を懸けた一週間”が、今はじまる!

しかし、本作を弁護士目で見ると、「死にたい小説家ウィリアム (アナイリン・バーナード)」と「クビ寸前の殺し屋レスリー (トム・ウィルキンソン)」との間で締結された、「報酬2000ポンドの前払いを前提とする1週間以内での暗殺契約」は公序良俗に反するため、無効になることは明らかだ。もちろん、それくらいのことは制作陣も監督もわかっているはずだから、本作はかきクセのあるアクの強い映画であることが明らかだ。

◆冒頭、橋の上からテムズ川に身を投げて自殺しようとするウィリアムと、それを止めようとする(?) レスリーとの面白い“対話”が登場し、ウィリアムはレスリーから名刺を受け取った後、やっと意を決して身を投げる。しかし、ウィリアムの身体はちょうどその時、橋の下を通りかかった船の中に落ちてしまい、死ぬことはできなかったから、アレレ・・・。

そんなウィリアムの話によると、ウィリアムの自殺 (の失敗) は10回近くくのぼるそう。つまり、その都度、何らかのハプニング (例えば、道路に飛び出して思惑通り車に轢かれたものの、たまたまその車が救急車だったため、セーフ) のため、生き延びたらしい。そのため、ウィリアムは自分のことを皮肉っぽく「ひょっとして僕は不死身・・・?」

とも語っていたが、さて・・・。

◆他方、あの時レスリーが名刺を配って“営業”していたのは、レスリーが英国暗殺者組合の毎月の暗殺件数のノルマを達成できず、引退に追い込まれようとしていたためだ。そんな縁(?)のため、ウィリアムはレスリーに電話し、とあるレストランで契約内容を聞く中、最も高くつく英雄死は費用的に到底ムリだったため、最も格安の暗殺コースを2000ポンドで契約することに・・・。この契約は報酬金の支払が先履行だそうだが、「死んだら金は払えない」から、そりゃ仕方なし。しかして、今ウィリアムは2000ポンドの振込みを終えたから、後はレスリーが暗殺してくれるのを待つばかりに・・・。

◆自殺志望の小説家ウィリアムにしてみれば、はじめた会ったレスリーのキャラは興味深かったらしい。そのため、暗殺契約を締結した後、レスリーのイメージを膨らませることによってウィリアムの小説の執筆が進んだのは何とも皮肉。しかも、それを読んだという出版社の女性エミリー(フレイヤ・メイヴァー)から電話があり、出版に向けてポスト引き合わせたいと言ってきたから、ウィリアムはレスリーに契約の破棄、もしくは延期を申し込むことに。しかし、レスリーから契約の破棄ができないことは十分説明したはずだと言われると、やむなくしばらくの延期を申し出たが、さてレスリーは・・・。

レストランで引き合わせてくれたエミリーのポストは、力は持っているようだがいかにも嫌われ者のキャラ。それでも、エミリーが気に入ったのならウィリアムの小説の出版を進めようと前向きの話になっていった。ところが、その時、何と・・・。

◆本作のイントロダクションには、「シリアスな展開ながらも温かみのあるキャラクターによって、一度きりの人生を生き抜くためのヒントが詰まった痛快ブラックコメディが誕生した!」と書かれている。せっかく2000ポンドを先払いして暗殺契約が成立したのに、新作の出版を巡ってウィリアムの中に生きる意欲が生まれ、また、エミリーとの恋が芽生える中でエミリーのため生きるという意欲が生まれたのは何とも皮肉。しかし、この手の契約が破棄できないのは、法的にも(?)映画の設定上も絶対的な条件だ。しかして、そこから生まれてくるさまざまな悲喜劇とは・・・?

◆本作では、ウィリアムとエミリーとの恋の芽生える物語に不自然感もあるが、ウィリアム側のストーリー展開は概ね予測できる。しかし、英国暗殺組合におけるレスリーの立場ははじめて見る世界だけに想定範囲外で興味深い。また、レスリーがそんな職業の夫のことをすべて理解しているらしい愛妻(マリオン・ベイリー)と仲良く暮している姿が微笑ましいうえ、レスリーが英国暗殺組合に逆らってまで“我が道”を進んでいく姿も興味深い。

レスリーによるウィリアムの暗殺は何度も実行されたのに、その都度それが失敗に終わるのはなぜ？ひょっとして、それはウィリアムが不死身の男だから・・・？他方、組織への裏切りのため英国暗殺組合が新たに派遣した腕利きのロシア人の殺し屋（クリストファー・エクルストン）は、いかなる任務をいかに遂行するの？そんなクライマックスに向けて、私は思わず身を乗り出したが・・・。

◆本作は、今ドキの映画としては珍しく90分だが、山あり谷ありの展開。そしてまた、想定内の展開もあれば、あっと驚く想定外の展開もあるから、結構面白い。レスリーによるウィリアムへの暗殺が実行される中、何とかそれから逃れ続けたウィリアムが、突然エミリーと愛を交わすシーンはかなり違和感がある。しかし、ウィリアムとエミリー、そして、レスリーとロシア人の殺し屋が対決する最後のクライマックスを何とか“解決”できたウィリアムは万々歳。そして、今や自殺願望から脱却したウィリアムは、エミリーとの新しいスタートを喜んでいて。もちろん、それは今やウィリアムと相思相愛状態になったエミリーも同じだ。

しかして、そこで起きる最後のハプニングとは？なるほど、これが英国式ブラックユーモア・・・？

2019（令和元）年9月13日記